Robert Woods, *Population Analysis in Geography*,
New York, Longman, 1979 (reprinted 1982),
278 pp.

人文地理学（だけではなく経済学，社会学などの他の社会科学の諸分科でも同様であるが）の研究者が人口現象を分析しようとする場合には，人口現象全般に対する基本的な，そして体系的な知識が必要である．換言すれば，人口現象の人文地理学的な分析を行うために，そしてその成果が社会科学全般の発展に何らかのかたちで貢献できるものであるためには，人口学の基礎を十分にマスターすることが必要不可欠のことである．

評者は，人口を対象とするわが国の人文地理学での研究報告に，人口現象に全く素人であることを物語る内容のものがかなりあることや，出生や死亡に対する関心がほとんど無いことを，かねがね残念に思ってきたが，同じことは，イギリスのカンタベリー大学で人口学を，シェフィードル大学で人口地理学の講義を行ってきた地理学者である本書の著者ロバート・ウッズも考えていたのであり，序文で「人口地理学が人口学の分野で進められてきた人口現象の分析方法を用いて研究を進め，人口学は地理学分野で定着している空間的視点をとり入れる」必要があると述べているところからも，それはあきらかである．また，そのように考えることから本書が誕生したのである．

本書は10章から構成されていて，第1章序章，第2章人口統計とその質の問題，第3章死亡（mortality）の分析方法，第4章死亡研究，第5章出生力（fertility）の分析方法，第6章結婚と出生力の研究，第7章人口移動，第8章人口モデルと人口構造の変化，第9章地域人口推計，第10章人口研究と人口地理学の将来となっている．全体としては，人口分析の技術的方法，モデルと人口理論についてのテキストであると言うことができ，それに加えて死亡，出生，移動の分析結果の人口地理学的視点，人口転換理論等の人口現象に関する諸理論の検討が付されている．

地理学者による，表題に「地理」の名が付けられている人口にかかわる書物としては，本書はまことにユニークである．それは出生や死亡に関する人口学的分析方法がかなりの部分を占めるという点ばかりでなく，たとえば序章では人口地理学の基本的研究課題についての簡単な記述につづいて，人口学的方程式の紹介と人口転換理論が論評されていること，生命表，静止人口・安定人口理論，コーホート分析，人口推計等．今までの人口地理学では触れられることのほとんどなかったが人口現象の本質にせまる，人文地理学的分析には必要不可欠の理論，モデル，概念が随所にみられることなどである．

他方，本書を人口学の立場からみれば，人口分析の方法論，人口モデル，人口理論等についての最新の研究成果が収録されていること，出生や死亡という人口現象の空間的，歴史的変化についての記述が盛りこまれていること，人文地理学あるいは地域科学の分野で開発されてきた，空間的拡散，人口の空間的相互関係と多地域人口増加モデル等についても触れられている，という点でもユニークな書物であると言うことができる．

また，人口地理学と人口学の両方に関連する点で言えば，人口統計そのものについての章が設けられている点をあげなければならない．わが国では，人口統計はその正確性や信頼性が高いことから，人口関係の書物では省略されることが多いし，とくに人文地理学者は人口統計を無批判に使用したり，時には誤った使い方をすることがしばしば見受けられるからである．

ともあれ，本書は，人口地理学者にとっての必読書であるとともに，人口学者にとっては，その入門書として有用であると位置づけされるものである．

なお巻末には数百に達する文献が付されていて，本書を超えた勉強を行おうとするためにはきわめて便利である．

（河邊　宏）